

討 論

司 会 應 地 利 明

ヒンドゥー化

應地 山崎さんの発言の中から、まずヴァルナ制度について議論したいと思う。

ヴァルナと生態

石井 ヴァルナ制度の中でもヴァイシャの概念がよくわからない。商工業階級とよく表されてはいるが、商工業という場合には都市のイメージがある。だが共同体的土地所有やヴァイシャ中心の生産活動という話を聞くと、農業というイメージが湧いてくる。しかし実際に農業に従事する農民という名前は出てこない。これらを総括して、ヴァイシャという概念をどう捉えればいいのか。

山崎 ヴァイシャの起源は「ヴィシュ（部族民）」で、アーリヤ部族のメンバーを指す。バラモン・クシャトリア・ヴァイシャまでがアーリヤで、バラモンの指導を受けることができる。シュードラは奉仕階級である隷属民で、ここに大きな差別の壁があった。この場合ではバラモンが司祭階級、クシャトリアが王侯武士階級、ヴァイシャは農・牧・商に従事する庶民階級という理解でいいと思う。

ところが時代が下るとその下に不可触民がおかれ、ここの差別の壁が強化されると、ヴァイシャ、シュードラ間の差別は弱まってきた。そして、やがてシュードラは農民を主体とする生産大衆のヴァルナとなり、ヴァイ

シャは商人業階級と位置づけられるようになる。現在ではシュードラまでがカースト・ヒンドゥー、すなわち、一般のヒンドゥー教徒とされ、その下の不可触民—現在では指定カーストと呼ばれる—と区別されている。

石井 シュードラの役割としての奉仕というのは、どのような意味で使われるのか。

山崎 古代のヴァルナ制度では、原則的には奴隷的な奉仕という意味だった。土地を持つこともできなかったから、バラモンやクシャトリアやヴァイシャの土地を耕すような農業労働もしていた。奉仕のできない者は職人になってもいいということになっている。

ただ、『実利論』の記事などから推測すると、新しい土地を開拓する場合、土地所有の原則がだんだんと崩れていく現象がある。シュードラを集めて、新しい村に移住させ開墾させる。シュードラはそこに住み着いて、税を払う限り、開墾した土地を一代だけは保有することができた。それがだんだんと世襲される形になり、いつのまにか一般の農民と変わらなくなっていく。

ヴァイシャとシュードラの違いは、古代において、バラモンの故地である北インド中部では依然としてあったと思うが、東インドや南インドでは、かなり早い段階から区別がいまいになっていたようだ。

辛島 『マヌ法典』による理念は現代まで続いており、シュードラの位置づけもそこでは

奉仕階級でしかない。それと実際の職業が農民として位置づけられるかというのは視点が違う。どこで分けるかが非常に難しく、地域的な違いとして考えない方がいいだろう。

むしろ初期のパンジャープに入って来た頃のアーリヤ人がよくわからない。よく牧畜民だと言われているが、比較的純粋な形のアーリヤ人の社会が、バラモン・クシャトリア・ヴァイシャに分かれ、ヴァイシャは農・牧・商の全てという位置づけになっている。しかし牧畜民がどういう形で農業をするのか、そういうことが可能なのか、生態学的なイメージがわからない。

山崎 パンジャープには牧畜民として入って来るが、ガンジス流域に進出した頃にはもう農業中心になっている。アーリヤ民族もパンジャープに住みついた500年の間に農業の技術を学んでいる。文献的にも、『リグ・ヴェーダ』の中の初期の作品は牧畜が中心の社会のもので、牛を飼ったり略奪したりという話が多いが、後期の作品になると農業関係の記述が増えていくようである。

高谷 元々アーリヤ人がいた草原では牧畜中心の生活だっただろう。典型的な牧畜民は略奪者でもあり、場合によっては騎馬民族になり、戦士になり、侵略者になっていく。草原のすぐ隣には砂漠があり、広大な砂原だが所々に水たまりがある。そこでは少し手を加えるだけで麦作ぐらいの農業はできる。メソポタミアだとBC4千年紀にはこのような形

の農耕が始まっていた。

リグ・ヴェーダの時代のインダス河周辺もこのようなイメージで捉えることができる。

辛島 インダス河流域だと、むしろ大氾濫があったり、排水工夫が行われている所だが。
高谷 水たまりなどといって、規模を小さく言い過ぎたかもしれないが、乾燥地の氾濫というのは、そんなに水の豊富な所ではないと思う。森林を開拓するような所ではなく、植生がほとんどない所に水があって、麦を作るような農業が中心だったのではなかろうか。そういう所に草原の牧畜民が支配者として侵入して来たのではないか。

應地 アーリヤ人の故地は、中央アジアから西アジアにかけての帯と考えられている。そこで行われていた牧畜は、牧畜だけで生活をしているモンゴルと比べてみると、極めて独立性が乏しい。農耕の存在を前提として営まれている。形態も、純粋牧畜民から始めて純粋農民までスペクトルが並んでおり、牧畜から農耕へは生活様式の僅かなベクトルの違いで移ることができる。より農耕的条件のいい所では、より農耕的なものになる余地は大きいと思う。

イランの例では、夏と冬で放牧地を変える。秋の移動する時に、山麓の雨水の集まる扇状地に小麦を蒔いておく。そして春に帰ってくる時に刈り取って持って行く。純粋遊牧であっても、きわめて粗放的な麦作が行われている。牧畜と農耕とを截然と分けて考えず

とも、連続的な変化として捉えれば、アーリヤ人達の農業的な適応も十分に考えられる。

田中 インダス河流域までの話は、そういう形で農牧複合でよいと思う。その時の農業というのは麦作で冬雨依存だが、インダスからガンジスに広がって行く時に会おうムンダやドラヴィダの農業は米や雑穀という夏作になる。夏作管理は冬の小麦作と比べて、非常に人手を必要とし、農・牧・商だったヴァイシャが商になり、農とシュードラとが一緒になってくるというのも、奉仕する人間を非常に必要としたことに起因するように思う。東へ行くほど雨も多く、作物が夏作中心になることを考えれば、シュードラが農民カーストへと移行していくことは大変わかりやすい。

中心と周辺

田中 地域名の話に関連して質問したい。『マヌ法典』に出てくる地域名から、中心と周辺のようなイメージができてくるが、このイメージはどれくらい続くのか。例えば現在、アーリヤ化やヒンドゥー化は、インド亜大陸全域に一つの統一をもたらすシステムとして成立している。いわばバラモンを中心とした一種の周圏構造があり、アーリヤ化がインド全体に及ぶことで周圏がさらに広がっていったと思う。アーリヤの中心と周辺という概念は、今でも生きているのかどうか。『マヌ法典』に出てきたような地域概念は、現在のインドにもあるのだろうか。

山崎 北インドの中心に住むバラモンには、依然としてそういう意識はあると思う。だが南インドのバラモンは、自分たちの住む地は北のバラモンの住む地と違わないと考えているだろう。例えば聖なる河であるガンジス河についても、その地に流れる一番大きな河がガンジス河だと解釈する。デカン高原ではゴードヴァリー川の上流が、ガンガーと呼ばれ、ヒンドゥー教の聖地となっている。本当のガンジス河に対するあこがれや、自分達バラモンの故郷がそこにあることは認めてはいても、その地方の中のヒエラルキーの中の最高位を確保している者たちには、バラモン特有の融通無碍な解釈によって、デカンにも南インドにもガンガーが流れているという発想があると思う。

田中 『マヌ法典』の原型が、それぞれの土地の中で中心と周辺を作るシステムとして動いているということだ。ところでその観念は、例えばシュードラのような他の階層も同じように共有しているのか。

山崎 バラモン以外にはあまりないだろう。

中世のインド

應地 山崎さんから、統一的な世界としてのインドの形成の起源と、ポスト・ヴェーダ時代の持つ意味を「アーリヤ化」という視点で説明していただいたが、我々の知る現代の有機的な統一体であるインド世界との間を埋め

る作業が必要ではないか。

例えば中世では、バラモンを中心としたインド世界の形成を強めたのは、どのような要素が関係してきたのか。あるいはイスラームがインドに入ってきたことの意味や、イギリスの植民支配の意味と、歴史的文脈に沿って考えていく素地が与えられたようにも思う。中世の視点からの問題提起はないだろうか。

豪族の役割

佐藤 古代インドでは、統一王朝はマウリヤ帝国のみで、その後は地方（地域）王朝のみである。山崎さんの「統一が異常な状況」が、これ以降続くことになる。ところで、帝国が形成されてくる場合、その中心部分があり、帝国の形成と発展、支配の拡大とともに、上から社会制度などが各地方に広げられていくものと考えれば、マウリヤ帝国の場合には各地での「カースト化」や「アーリヤ化」も納得がいく。しかし、小王国、地方王朝が各地に分立する状態の中で、「アーリヤ化」や「カースト化」をどのように捉えていくのか、ムスリム支配下のインド中世史の問題でもあると思う。

私はこうした各地に簇生する地方（地域）王朝の樹立者を豪族層と捉え、バラモンがこれら小王と支配層をクシャトリヤとすることによって「アーリヤ化」、したがって「カースト化」が行なわれていったのではないか、山崎さんが、南インドの王たちがバラ

モンを招き・・・という言葉には、こうした内容があるものと理解している。

こうした視点は、デリー諸王朝ムスリム支配下での「カースト化」、「クシャトリヤ化」といった問題を理解するにおいて、必要ではないかと考えている。北インドにおけるムスリム政権の成立によって、ヒンドゥーの王朝は次々と滅ぼされ、それぞれ地方に逃れた遺臣たちはその地の部族などと結んで豪族層を形成し、デリー政権の弱体化に乗じて各地に小王朝を樹立していった。これらの小王がバラモンからクシャトリヤとして認められ（あるいは認めさせ）、こうした過程で「カースト化」、「アーリヤ化」が進行していったとは考えられないか。

部落社会の秩序

山崎 バラモンの一つの特徴は、自らが労働、特に生産労働をしないことを理想とするところにある。したがってスポンサーが必要となる。スポンサーがいる所なら何処へでも行く。地方の王達が、クシャトリヤとしての権威づけが必要であったり、あるいはアーリヤ的な秩序を打ち立てようとするときに、バラモンに生計の保証をすることで彼らと提携することがあった。保護者を求めて頻繁に移住することも行われており、これもバラモンの一つのあり方だと言える。アーリヤ化に果たしたバラモンの役割は非常に重要で、それを可能にしたのも移動の自由があったからだ。

だが、一方でバラモンは村に住み着いてしまえば、そこでのジャジマニー的な交換関係の中に入り込み、親子代々にわたって、村人の生活、村の生産活動の一翼を担い、多くの儀礼的な面に関係する。そこへイスラームが入ってきて、バラモンを追い出しイスラーム化しようとしても、生産システムそのものが崩壊するという問題がある。バラモンには移動の自由はあるが、他方、村落の生産活動の一環として位置づけられたバラモンほど安定したものもない。バラモンが住み着くことは、村落社会の秩序化を意味する。王がバラモンに村を寄進したのも、このような狙いがあったのことだろう。

佐藤 王がバラモンに村を寄進するという行為は、古くからさかんに行われているが、18世紀の史料には村長などの小豪族がヒンドゥーの寺を作ってバラモンを招き、バラモンへの扶持と寺の維持費のために土地を寄進し、国家から免税地にしてもらっている。村のレベルでは、当時こうしたことは日常化しているが、中世ではこのような形で下からの「カースト化」、山崎さんの言う「アーリヤ化」が行われていったのではないか。

應地 中世を通じてバラモンの拡散と土着化が進行し、それがアーリヤ化を根づかせていったと理解していいのか。

山崎 私はそう理解している。

辛島 ただ気になるのは、「アーリヤ化」という視点で議論を続けていいのかという疑問

がある。むしろ「バラモン化」あるいは「ヒンドゥー化」のように、中世に新しいインド的なものが出てくるという視点で議論をしたい。山崎さんが提供された話題は、設定としてはもう一つ前の時代の話で、この場合は逆に「アーリヤ化」と限定しておいた方がいいだろう。その先の時代になると受け入れる側からの問題もある。

王の役割

臼田 インドは様々な地方に分かれているのが常態であり、いわば「わける論理」が働いていた。むしろ政治的な統一は例外的であった。しかし山崎さんの話はバラモン化での「くくる論理」の説明だろう。ただし「くくる論理」は研究者の視点が介在する抽象的なレベルにも成りかねない。

歴史の問題として考えた場合、王の果たした役割もバラモンと並んで非常に大きかったと思う。王権は統合へのベクトルも持ちえただろうが、政治的にインドが分裂していた状況をみれば、その力が実際には「わける論理」として働いてきたと言えるだろう。その意味で王権をどう捉えるかが非常に大きな問題となってくる。

しかもムスリム支配やイギリス支配では、ヒンドゥー以外の王権を意味することになる。王権という立場から考えていけば、ヒンドゥーの時代だけではなく、ムスリム時代、イギリス時代、そして現在に至るまでの問題

が導き出せるのではないか。これまでバラモンの視点で捉えられていた問題も、王権という立場から捉え直すことができるだろう。あるいはバラモンの文献も、バラモンによって秩序づけられた視点でしかない。我々の常識に従って、逆から読み直してみるという作業も必要ではないだろうか。

イギリス時代までのインドは、フロンティアを抱え込んだ世界だったと思う。人口も急激な増加を始めたのはこの半世紀の間にすぎず、未開拓の地も多かったと思われる。クルケーの説では、王権はどこにでも興るというのではなく、特定の地域が中核として捉えられる。その周辺、あるいはその領内にすら未開拓地があるという状況で、フロンティアを抱え込んでいる。このような状況から、次第にフロンティアがなくなっていく過程を考えていけば、一つの実態に沿った考え方ができるのではないだろうか。

にもかかわらず、外からは統一的なインド世界の姿が見えてくる。それはバラモンの問題だけではなく、各地に宗教的な巡礼地ができたり、あるいはチャイタニアのように、東インドの宗教家が西インドを回って、インドをほぼ一周してしまうような例もある。このようなことがインドに一体性をもたらすような形があったのかもしれない。

前回は東南アジアの方々が「わかる」「くくる」「つなぐ」という、非常に魅力的な概念を提出された。インドの中でのそういう要

素を挙げてみて、その相互関係を考えてみれば、インド世界の特性や特殊性を探ることができるのではないだろうか。

王権の正統化

田辺 王権の果たした役割や中核地域に注目することは重要だと思う。ヒンドゥー王権はバラモンが正統化したわけだが、古代と中世では正統化の仕方に大きな変化があった。古代ではバラモンが供儀をし、王が供儀祭主となることで正統化がなされてきた。だが、中世になると王と中核地域の主たる神との結びつきが重要となってくる。中核地域の神のために王は寺院を建設し、その礼拝祭祀のためのパトロンとなった。オリッサの例では、さらに王は国家神たるジャガンナートの「代理」あるいは「第一の奉仕者」であるという観念ができていく。このように王と結びついた神にバラモンが礼拝をするという形で王権の正統化がなされるようになった。つまり、王権の正統化の装置が供儀から礼拝へと変容したということだ。

中核地域の神をめぐる信仰と儀礼の形態は、フロンティアを開拓していく中で、非アーリヤ的な要素を様々に取り入れつつ成立した。寺院の置かれた場所は聖地として、王権と結びつきつつ、政治・宗教的に重要な機能を担い、発展する。こうした中で王権は、バラモンによる正統性を維持しつつ、フロンティア空間の中の異質な文化要素を取り込む

形で、多元的で重層的な社会と文化を統合する求心的な主体としての役割を担ったと考えている。

イスラームとヒンドゥー

石井 中世はインド史にとって「断絶」なのか「連続」なのか、理解しきれないところがある。「バラモンと王権」という一つのチャプターがあり、それは非常に密接な関係だった。今の指摘で視点をバラモンから王権に移すと、それはどうなるのか。確かにムガルは征服王朝かもしれない。その場合には権力がイスラームを担っている。それがどのような形でヒンドゥー的な形の中に入り込んできたのか。それとも棲み分けをしていたのか。そこに何らかの融合が行われたのか。そのあたりのイメージがうまく湧いてこない。

佐藤 ムガル時代から受ける印象は、政治権力の間では支配の方便として「棲み分け」が行われ、庶民の間ではヒンドゥー教とイスラーム教の信仰との間に大きな差異を感じていなかったのではないか。ムガル王朝では、クシャトリアのラージプートの王女を皇帝のハーレムに入れても、彼女たちにはヒンドゥーの信仰を認め、また帝国体制に参加するヒンドゥーの豪族層には宗教を異にするにもかかわらず、公平な立場をとっている。また、ヒンドゥー教の寺院にムスリムの墓があり、ヒンドゥーもムスリムも拝んでいるという状況で、庶民レベルでは双方の宗教が極端に相異

するという意識は少なかったのではなかろうか。

石井 イスラームが変質したということだろうか。

佐藤 教義は別として、宗教そのものに何か非常に近いものがあったのではないか。例えばイスラーム教徒は偶像を廃するが、結局それは聖者崇拜になってしまう。聖者の墓を崇拜するのは構わない。そのレベルではヒンドゥー教徒の偶像崇拜とも似てくる。

石井 それはキリスト教に置き換えても同じで、そういう意味では理解できる。しかし、バラモンがムスリム王権を正統化するというのとは全く違う話になる。王権が正統化される原理はイスラーム的なものなのか、ヒンドゥー的な教義に基づくのか。

佐藤 ムガル帝国の支配下に入ったラージプートの王国の王位は、皇帝の許認可を受けているが、それは王国における王位の継承を前提としており、皇帝の許認可も彼らが帝国体制へ参画するようになった帝国の成立期はともかくとして、形式化していった。また、王国での即位・王位の継承の儀式はバラモンによって行われており、その意味での王権の正当化はヒンドゥー的なものではないかと思う。

石井 そうなるとイスラームが変質したと考えざるを得ない。

辛島 イスラームが変質する必要はない。問題はヒンドゥー側にあるとも言えるが、「ヒ

ンドゥー」という言葉で議論するから混乱するのだろう。インド的な体制としてイスラームをも組み込んでしまうと理解した方がいい。つまりイスラームの王も、王である限りは王だという考え方で正統化され、受け入れられていくようなインド的構造が存在しはじめていると解釈したらどうだろう。

支配様式

應地 石井さんの質問には、王権がムスリムに変わった時に、具体的な支配のあり方自身も変わるのではないかと質問も含まれていたのではないかと。

石井 東南アジアのジャワを考えれば、王権は仏教であったりヒンドゥーであったりする。その神像や仏像を見ても素人にはわからない。ジャワ人にとってはファッションと同じでどちらでもいい。そう考えると王権は仏教でもヒンドゥーでもいいと言えるだろう。

ただ、イスラームは一神教で非常に排他性を持っている。イスラーム世界からすれば、考えられないようなことがインドで起こっている。この場にイスラームの学者がいれば、もっと違う議論が出てくるだろう。

佐藤 例えば、ラージプートの王国でも、各郡ないし郡都にはカーディというイスラームの法官が、また郡の徴税官のポストの一つにはアラビア語とペルシャ語の合成語からなるカーヌーンゴと呼ばれる帝国の役人、しかも後者は在地から任命された役人が存在して

いる。したがって、イスラームの制度的なものが様々な形で入っているが、庶民のレベルでの宗教意識にはその相異はあまりなかったのではあるまいか。やはり、制度的な面で見ると、実際のレベルで見るとは違うと思う。

石井 それは宗教を考える時には、当然考えなければならない問題だ。社会制度と観念的なものとは違う視点で捉えなければならない。

ただ、もう一つ別の問題が立てられるのではないかと。例えば日本人で考えれば、800万の神の中に、キリストが1人くらい入っても構わないような感覚があるかもしれない。クリスマスを祝って、とげ抜き地藏にお参りして、明治神宮に参拝してもいい。このレベルで考えるならば、インドにおけるイスラームも理解できる。インドにも確かに神選びのような考え方があり、それにアッラーが結びついてもいいのかもしれない。インドの側からはそれでもいい。しかしイスラームのグレート・トラディションからすれば非常に具合が悪い。なぜ拒否反応が起こらなかったのかが疑問だ。山崎さんのグレート・トラディションの議論の延長で言えば、中世は「断絶」と捉える必要があると感じている。

臼田 例えば初期のイギリス時代では、英領インドでのキリスト教の布教は統治の安定の妨げになるとされ、禁止していた。ムスリム支配の場合でも、王権を担う時には統治の安定を優先させるのではないかと。ヒンドゥーと

イスラームが融合し合う状況が好ましくないことがあっても、統治の必要上、それが良ければ受け入れてしまう点はあり得たのではないか。

王の特殊性

臼田 逆に、ヒンドゥーにとって王がムスリムであることは、どのように考えられるのか。我々は王とクシャトリヤとを結びつけて考えがちだが、王はあくまでも王であって、「王＝クシャトリヤ」ではない状況は、いくらでも歴史上にある。王は特別な存在で、カーストが何であろうと受け入れられるならば、ヒンドゥーでなくても、王としての機能を果たせば受け入れられる素地が出てくるのではないか。

山崎 正統派バラモン思想では、四つのヴァルナは人類の起源にまで遡る。ところが王というのは、人類の社会が乱れた時に、社会の秩序を維持し、人民の生命・財産を守るために、最高神ブラフマーが作って人類に与えたとされている。クシャトリヤの起源と王の起源とは、理論上は全く別のものである。人民の生命・財産を守り社会の秩序を維持する者であれば、王はクシャトリヤでなくてもいい。

臼田 実際のクシャトリヤというのは、紀元前後あたりから誰を指すか全然わからないような状況があった。ラージプトが出てくるまでは、クシャトリヤというのはわけがわか

らない存在だった。

山崎 それでヒンドゥー法の学者も非常に悩む。結局は、人民の生命・財産を守り、社会の秩序を守る者であるならば、王となりうるという結論になる。『マハーバーラタ』の中でも、バラモン、ヴァイシャはもちろん、たとえシュードラであっても、その条件さえ満たせば王となりうると思われている。理想としてはクシャトリヤだが、実際には完璧なクシャトリヤはあまりいない。

臼田 王というのはヴァルナ体制からも超越した、一つの特別な存在と考えた方が分かりやすいのではないか。

山崎 仏典ではもっとはっきりしていて、ジャータカにはクシャトリヤではない王がたくさん出てくる。王の起源についても、最初の王はみんなが集まって選んだとされている。『マヌ法典』など正統派の文献に見出される神格化した絶対的な王は、ヴァルナを越えた存在のように見えるが、一方で王はクシャトリヤの代表として、バラモンの助けを借りつつ、ヴァルナ社会を維持する役目を果たすことが理想とされている。

クシャトリヤの役割

坪内 そうなると、クシャトリヤというのはインドにおいて必然的に必要なものだったのかどうか。アーリヤ化の過程において必要な存在だったのか。クシャトリヤ自身の位置づけがもう少しほしい。東南アジアにおけるヒ

ンドゥー化やインド化では、この要素が消えるような印象がある。クシャトリヤをそこから逆に考えてみると、クシャトリヤはインド・プロパーにとってはきわめて重要な要素かもしれないが、バラモン化や大きな意味でのインド化にとっては、どうでもいい要素かもしれないとも思える。インドにとって、あるいはヒンドゥーにとって、アーリヤ化によって、クシャトリヤの持つ本質的な意味は、果たしてどの程度のものなのだろうか。

山崎 正統派のプラナーナ文献などによると、マウリヤ王朝の直前にシュードラ出自であるナンダ王朝が興り、周辺の正統クシャトリヤの王朝を全て滅ぼしてガンジス河の流域を統一したので、それ以後はインドからクシャトリヤ王朝が消えたという。

ただ、王権についた者の出身はどうかであれ、自己の地位の正統化を主張するためには、クシャトリヤであると認められたい。そのためにクシャトリヤの王であることを示すための即位式を行う。むしろインドの歴史の中ではそういう王朝の方が多かっただろう。クシャトリヤの必要性は、王権をとった者が自己の地位の正統性を主張するためにあったとも言えるだろう。

佐藤 このようなクシャトリヤの意識が強調されるようになったのは、ムスリム支配に関わりが深いように思われる。A. R. ハーン氏の研究によれば、16世紀の後半、アクバルが帝位に就いた時、帝国12州で禄位200以上

を与えられていた豪族は61人で、そのうちラージャスターンの豪族は40人、中でもラージプートは39人を占めている。他方、北インドの中枢部北部州（U. P.）を形成するデリー、アーグラ、アワド、アッラーハーバードの4州では合計2人、ビハール州0人である。このことは、デリー諸王朝300年のムスリム支配がこの地の有力な豪族層を根こそぎにするほど強烈に及んだことを示している。しかも、ムガル帝国におけるラージャスターンのラージプートの役割が増大すればするほど、クシャトリヤはラージプートであるという正当化が名実ともに主張されるようになっていったのであろう。クシャトリヤの問題は、こうしたムスリム支配との関係の中で考えることも大切ではないか。クシャトリヤとしてのラージプートのムスリムとの戦いが、またその存続がヒンドゥー文化、ないしバラモン文化を守ったことにも注目しておきたいと思う。

辛島 今の議論も、王とクシャトリヤが同じなのかどうかというのも非常におもしろい議論で、どこかでまた続けていきたいと思う。というのも東南アジアになぜカースト制度が入らなかったかというのが、この問題にも関連して重要な議論になると思うからだ。その前提として、なぜカースト制度がインド全域に広がり得たのかという問題をインド側として答える必要があるだろう。

インドの全域でカースト制が定着し、イン

ド的な社会が成立している。歴史を通じてそれがあからこそ、インドというまとまりで我々は議論する基盤になっている。カースト制度が定着していく過程で、王権が一つのポイントとなることは確かだ。しかし王権の存在とその役割だけでそれが説明できるかは

疑問である。その事も含めて、なぜインドの中でカースト制度が広がり得たか、なぜ東南アジアではカースト制が根づかなかったのかという議論ができればいいと思う。これを明日の予告質問としておきたい。